

## 研究ノート

## サミュエル・ゴムパースの

## 伝記風の素描（V）

—サミュエル・ゴムパース研究のための覚書(5)—

小林 英 夫

## 第 3 部 （上）

## 21 ゴムパースと教育宣伝活動

労働組合運動がその社会の公認の秩序として認められるためには、運動内部の知的水準の高まることが必要だが、それとともに運動にたいする外部からの認識の深まることも必要である。そのためにゴムパースは、既存の教育機関を労働者に広く開放させることに努力しただけでなく、究局には、輿論や国家の政策に労働界の意見を反映させることにかなりの成功をおさめた。ゴムパースは、その意味でも労働運動の父というにふさわしい。

ところでそのゴムパース自身は、自己の教育を自力で培わねばならないという開拓者の苦勞をなめた。だがかれには、その限られた学習の機会をいささかなりとも逃がさぬ貪欲さがあつた。すなわち「幼くして工場に入らねばならぬものにとってさえ、学ぶ機会はなんと素晴らしくあることか……わたしは、生活という学問のなかに多くの公開講座をみいだした」<sup>1)</sup>というわけである。この素描の連載の最初に描いたように、たとえばクーパー組合会館（Cooper Union）という知識の宝庫があつたし、またさまざまな思想の流れを汲む労働者との知的な交流があつた。葉巻工場では、仲間の一人に朗読させることによって、作業中にも学ぶことができたし、また作業中にも思考をやめず、なにかよい考えが浮ぶと、仕事を中断してメモをとるという調子であつた。もっともゴムパースの述懐しているように、葉巻産業の賃金形態が出来高制でなかったら、雇主がゴムパースのメモの習慣

を大目にみたかどうかは疑わしかったであろう。

ゴムパースは、「倫理文化協会」(the Ethical Culture Society) および「社会改良クラブ」(the Social Reform Club) という2つの組織の影響をかなり強くうけている。前者は、既成の教会秩序に反抗したフェリックス・アドラー (Felix Adler) の手になる道遥学派的な組織であって、日常生活に有意義な倫理的基準をつくらうというものであった。権威による抑制にたいしては本能的に反撥した<sup>2)</sup>というゴムパースであってみれば、かれがこのグループに加わったのも不思議ではない。かれは、ここで一種の倫理教育をうけ、かつその実践をおこなったわけである。

これにたいして後者の「社会改良クラブ」は、その名称からも推察がつくように、ヘンリー・ジョージ運動の所産であった。ゴムパースは、前にもふれたように、ジョージの思想には大して共鳴してもいかなかったから、かれがこのクラブによって多くを教えられたとは、あまり考えられない。だがこのクラブの実践活動は、大いに注目されてよい。とくに労働者教育についてそうである。ゴムパースを始めとする熱心なクラブ員たちは、夜間公開講座の計画を強力に推進しただけでなく、そのために公立学校の校舎を広く一般市民に開放させるよう力をつくした。また当時は組合の独自の建物のない時代でもあったから、学校を組合集会の場所に利用すべきことが強調されさえもした。こうした運動は、「ニュー・ヨーク実業家連盟」(the New York Board of Trade) の支持をえたことによって、ほぼ解決されたといえる。というのも、ほどなく州教育委員会 (the Board of Education) は、各種の公開講座を公立学校に設置するにいたったからである。

ゴムパースの労働者教育活動は、これを機に一層活潑となった。前述の「倫理文化協会」が生成発展をとげて「人民協会」(the People's Institute) となると、かれはその理事役をつとめた。それのみではない。労働大学の計画がヴルーマンたち (Carl & Walter Vrooman) によってとりあげられると、かれはその支持を惜しまなかった。時代の趨勢として、すでにジョンズ・ホプキンス大学の教授たちが労働者のために大学の公開を始めていた<sup>3)</sup>、それに80年代は、とくにイギリス流の大学公開講座制度の擁護された時代でもあった。

だが大学のこのような進出は、ゴムパースにとっては逆に大学を啓蒙する機会でもあった。かれによると、大学卒業者は一般に社会の指導的地位につく故、学生を啓蒙して労働運動を正しく理解させておくことは、とくに労働組合の将来にとって必要である。たまたま経済学の対象が抽象的な「経済人」より現実に行動する個人へと移り、その結果いわ

ゆる労働問題の研究が大学で重要視されてきたことでもあるから、この機会を逃すべきでないというのである。ゴムパースは、ハーバード、エール、コロムビア、コーネル、シカゴ、ウィスコンシン、カルフォルニア、ミシガンなどの主要な大学を講演してまわった。かれがジェンクス (Jeremiah Jenks)、イライ (Richard Ely)、コモンス (John Rogers Commons)、カービー (John Kirby)、ホクシー (Robert F. Hoxie) といった著名な教授たちと親交を結んだのも、この頃である。そして一次大戦後には陸軍大学で講演するようになったし、また海軍大学も陸軍に倣うことを忘れなかった。

教育機関そのものについていえば、一般に教師たちの労働運動にたいする理解の深まることは、教育そのものが労働組合にとって望ましい方向にむかう可能性のあることを意味する。その意味では、1897年のシカゴにおける教員組合の結成は重要である。教育委員会の妨害にもかかわらず、それがやがて全米的な組織にまで発展したことからみると、薄給のかれらにとって、それが大きな救いであったことがわかる。教師の団結は、高等教育機関にまでおよんだ。とくにこの場合には、社会科学の研究の自由という問題と結びついてきたから、労働問題にたいする大学の研究を深めるためにも、大学教師の団結を擁護することが必要であった。ゴムパース自身、そのために大学に赴いて演説することをいとわなかった。

ところでこのような教育機関の開明化は、その効果がやや将来に期待されるのにたいして、一般社会そのものの啓蒙は、組合の直接的な要求を速やかに実現するためにも、ぜひとも必要である。このいわゆる「パブリック・リレーションズ」の観点からすると、労働出版物ほど重要なものはない。80年代に組織された「労働新聞協会」(the Labor Press Association) は、その点で大きな貢献をなした。だがゴムパースがとくにその必要を痛感したのは、たんなる労働新聞の発行そのものではなくて、使用者ないし政府当局の立場によらない公正な労働関係の資料および統計を発表することであった。とはいうものの当時にあっては、たとえAFLのような組合組織が独自の資料を用意したとしても、それを利用しようとするものは少なかった。そこでゴムパースは、政府の各種委員会の報告書が一般に信用されて広く利用されている事情にかんがみ、委員会の内部に労働界の意見を反映させることを上策と考えたのである。

ゴムパースのその活動は、1878年の下院労働調査委員会に始まっている。この委員会は、当時の不況の原因をさぐり、その対策を検討しようとするものであったが、ゴムパースたちは、ユストゥス・シュワープのごとき社会主義者たちがこの委員会と関係をもつこ

とを嫌ったのとは対照的に、それを自己の主張を周知せしめる絶好の機会と考え、積極的に出向いて証言をおこなった。とくにアドルフ・ストラッサーは統計の素養があったから、葉巻産業の労働事情について詳細な統計の説明をおこない、委員長のヒューイット氏をいたく感銘させたといわれる。さらにゴムパースは、たとえば上院教育労働委員会が労働調査をおこなっても、その結果がされる委員会の勧告が一向に公表されない点を明らかにしたし、また1894年にプルマン・ストライキが発生すると、かれは政府の調査委員会において、国家権力が争議に介入することに強い反対をしめしたのである。とはいっても、マッキンレー大統領が1898年に任命した「合衆国産業委員会」(the United States Industrial Commission) の場合には、上下両院議員のほかにも多くの組合指導者が委員として参加していたから、その調査報告は、労働運動にとって貴重なものとなった。面白いのは、1912年のマックナマラ事件<sup>4)</sup>を契機に設置された「合衆国労使関係委員会」(1912~1916)の人選である。労働者側の要求でこの委員会には3人の労働者委員がみとめられたが、タフト大統領は、AFLの推す2人の労働委員に難色をしめして、独自に労働委員を決定しようとした。当然のことながらゴムパースはこれに強く抵抗し、結局ウィルソン大統領の代になって、AFLの推す委員の1人が認められたという。労働代表の人選についてAFLほど有能な機関はないというゴムパースの主張は、ここになかば認められたわけである。

こうした政府委員会内部での労働代表の活動は、世論を啓蒙するのに非常に有効であった。ゴムパースの関係した既述の「社会改良クラブ」も、労働立法委員会をつくって労働保護立法の要を説くのに大いに寄与したけれども、それとて、このような政府委員会活動ほどの力をもちえなかった。ゴムパース自身のちにさまざまな政府の公職につくようになったから、なおのことである。事実かれは、「わたしのなした最も重要な仕事は、国家の政策を最終的に決定する基礎となる大量の情報のなかに、労働者の見解を真に反映させるということに貢献したことである」<sup>5)</sup>と語っている。いいかえると輿論、法律、慣習といったものの価値基準が、ゴムパースの比較的長い生涯の間に、かれの努力によって大きく変わってしまったのである。制度的にみると、それは、たとえばゴムパースの強調するオーストラリア式の投票制度<sup>6)</sup>や8時間労働制の出現であった。かつては「夢想家のたわ言」(“ramblings of a dreamer”)といわれたものが、このようにつぎつぎと現実化したものだから、ゴムパースは、いとも満足げに自分の過去の啓蒙活動を回顧することができた。

ゴムパースのこのような啓蒙活動は、ときとして国際舞台にもむけられたが、そのよい例は、万国博覧会の開催をめぐる動きである。たまたま1892年はアメリカ発見400周年に

あたったから、それを記念として万国博覧会を開催してはという計画がだされ、当初はニューヨークがもっぱらその推進役にあたった。けれどもそのうちニューヨーク市自体は「絶えざる万国博覧会」というにふさわしいから、いまさらそれをニューヨーク市で開くこともあるまいとの理由で、シカゴ市が博覧会開催地として名乗りをあげ、結局のところシカゴ案がニューヨーク案にとってかわった。ゴムパースは、ニューヨーク市万国博覧会推進の実行委員会の一員だったことでもあり、乞われるままにシカゴ万国博覧会委員会の委員となって、土地利用と建築の部門を担当することになった。かれは、これを「文明の素材を創造するうえでいとも重要な役割を演ずるところの人間要素を……考慮させる機会」だと考えただけでなく、面白いことに、それが「組合労働者に建築物を建設させる機会」であることをなによりも重視したのである<sup>7)</sup>。ゴムパースは、万国博覧会委員を受諾したのは自己の名誉のためではなくて、それを「奉仕の機会」とみたためであることを強調している。

この1893年のシカゴ万国博覧会は、その計画の大きさと初の高架電気鉄道の走ったことで今も語り草となっているが、別の意味でもっと重要だったのは、博覧会の理事者たちが、これを機会に国際労働会議を開催しようとしたことである。ゴムパースは、そのための諮問会議に協力することを求められ、早速フランスのヴィクトル・ドゥレイ（Victor Delehaye）やドイツのカール・レギエン（Karl Legien）その他にたいし、シカゴに労働代表を派遣してくれるようにとの連絡をとった。イギリスの労働組合会議（TUC）にたいしては、国際労働会議準備委員長のウォルター・ミルスをつうじて招待の旨が伝えられた。けれども予想に反して労働代表の派遣を確約した国の数はすくなく、そのため従来の国際労働会議（International Labor Congress）の計画は変更されて、あらたに労働問題を2日間にわたって討議するために労働会談（Labor Conference）を開こうということになった。だがこの計画変更は、かならずしも適切とはいえなかったようだ。というのも最初の計画になる国際労働会議についての問合わせが後を断たなかったし、また実際にそれへの参加の意思をもった各国の労働団数の数は、ゴムパースたちの公式に確認したよりも多かったと考えられているからである。

問題の「労働会談」は8月に開かれ、各種の討論のうちに、なんということもなく終わった。けれども、この機会に各国の労働代表がニューヨークに立ち寄ったから、ゴムパースたちがかれらと直接に話しあって、各国の労働事情にかんする情報をお互に交換しあうことができた。ゴムパースは、このことの意義をかなり重視している。というのにもかれ

は、社会主義者たちは緊密な国際的連繫をはかっているだけでなく、さらに自己の目的のために積極的に労働組合攻撃をするという熱意も強いので、それにたいする自己防衛のためにも、またとくにAFLにたいする正しい認識を海外に広めるためにも、労働組合の国際的連繫をはかる組織ないし機関が必要であると痛感していたからである。

ゴムパースはまた、万国博覧会の仕事をつうじて実業界の指導者とも知りあうことができたから、その意味でもこの博覧会は、結構面白いものだったらしい。だがこの博覧会をはなれてもっと興味深い事実は、この年に、ゴムパースが実業家デヴィッド・ルービン(David Lubin)氏の国際的な活動の援助をしていることである。氏はサクラメント市に住む大百貨店主であって、その職業的関心から、社会の配給機構を改善すれば不要な中間経費を省くことができると簡単に考えたが、やがてその非現実的なことに気づくと、もっと実際の案として、「国際農業協会」(the International Institute of Agriculture, I. I. A)なる組織の設置を考えるようになった。その協会の目的とするところは、家畜と農産物の国際市場を安定せしめて人為的な価格操作を排除し、それによって万国の農民の共通の利益を守り、かつ万国の国民の基本的な食糧を確保しようというものであった。その具体的な活動は、家畜や農産物の品質、数量および価格等にかんするあらゆる統計を国際的に蒐集分析して発表することにあった。ルービン氏は、自己の計画に合衆国が冷淡だったことから英国の国際綿紡績協会々長を説き、さらにはイタリア国王に執拗な接近をこころみた。氏のその努力はついに功を奏し、1905年ローマにてイタリア国王の庇護のもとに、計画どおりの「国際農業協会」が設立されるにいたった。その設立総会に合衆国が代表を派遣してくれることを切望したルービンは、イタリア首相を口説いてそれを要望する首相書簡を書かしたうえで、さらにその書簡の要望という形式でルーズヴェルト大統領を説得してくれるよう、ゴムパースに依頼したのである。結局のところ合衆国は、ルービン氏ほか1名の代表を派遣したから、ルービン氏がゴムパースのこの功績を深く謝したのも当然である。この国際組織は、その後成長をとげて世界の主要な農業国をふくむ77ヵ国によって批准されるまでにいたり、一次大戦中も活動を続けたばかりでなく、1945年に国際連合の食糧農業機構(FAO)にひきつがれて1946年に解体されるまで、国際的に看過できない寄与をはたしたという<sup>8)</sup>。このようにみえてくると、ゴムパースという男は、たんなる労働指導者というにはいささか多面的でありすぎたといえる。

(1) Samuel Gompers, *Seventy Years of Life and Labor*, 1925, Vol. I, p. 431

(2) ゴムパースは、若くして教会との関係を断ち、労働運動の講演のためにやむをえざ

る場合のほかは、教会にいかなかった。かれは休日を守らず、また自分や妻の死に際しては非宗教的な葬儀を命じたほどである。（Bernard Mandel, *Samuel Gompers*, 1963, p. 10）

- (3) 労働者学校が非公式ながらも成功した最初の例は、ジョンス・ホブキンス大学が1879年に始めたものだといわれる。（I. L. H. Kerrison and H. A. Levine, *Labor Leadership Education*, 1960, p. 5）そして1887年にはイギリスの大学公開講義制度が擁護されることになる。だが合衆国で“university extension”という言葉は、教授および研究の学内プログラム以外のすべての大学活動をふくむとされる。ある調査によれば、大学の extension 制度の大半は1905～1925年の間にできたらしい。（John R. Morton, *University Extension in the United States*, 1953, p. 9 & Table 4）
- (4) 建設産業の労使関係は不安定で、1907年から1911年にかけて暴力事件が続発したが、たまたま1910年10月に「ロス・アンゼルス・タイムズ」のビルディングが爆破され、橋梁建設組合のJ・JおよびJ・B・マックナマラ兄弟その他が逮捕されて、有罪判決をうけた事件のことである。タフトとパールマン両教授は、こうした組合の闘争方法を規制する権限がゴムパースたちになかったことを指摘している。また両教授は、この事件がアメリカ労働運動の戦闘性をなくしたとか、またアメリカ労働運動史上の「転換点」であるとか考えることは、正しくないという。（Selig Perlman & Philip Taft, *History of Labor in the United States, 1896～1932*, New York, 1935, Vol. IV, pp. 319—325）
- (5) Gompers, *op. cit.*, pp. 461—462
- (6) いわゆるオーストラリア式秘密投票制（Australian ballot）は、○×ないし順位にて投票者の意思表示をさせる記号主義のことで、筆跡を残さず秘密の保たれる点で自書主義にまさるとされる。1856年オーストラリアではじめて一般化されたので、この名があるが、合衆国では、19世紀後半の政治改革運動の一環として、1888年に採用された。
- (7) Gompers, *op. cit.*, pp. 454—455 なおこれと対照的に日本の建設労働組合界は、近く日本でおこなわれる万国博にたいして、ゴムパースのような積極的な姿勢をしめしているとは思えない。
- (8) この点は、*Encyclopædia Britannica* のI. I. A. の項による。

## 22 オペラとドラマ

ゴムパースは、わざわざ自伝の一章を割いて音楽と演劇にたいする自己の愛着ぶりを描いているが、読んでいてこれほど楽しい章はない。かれの音楽熱がロンドン時代の祖父の感化によることは、すでにのべたところだが、かれの父もちょっとしたテノールの持主で、借金してまでイタリア・オペラに熱をあげたという。ゴムパース自身は、結婚後に短期間習ったヴァイオリンの腕もさることながら、少年の頃から歌うのが好きで、「ニュー・ヨーク音楽協会」なる団体の少年合唱団でバスの部をやっていた。ただし音符は読めなかったという。

最初の子供を病でなくした痛手からヴァイオリンを捨ててのちは、ゴムパースの音楽とは、もっぱら聞くことと歌うことだったから、かれがとくにオペラを愛好したのは当然である。それにアメリカの音楽史をひもとけばわかることだが<sup>1)</sup>、ゴムパースの組合活動がとくに活潑をきわめた80年代は、合衆国の音楽の世界でもまた、大きな出来事の多かった時代である。たとえば1881年にはボストン交響楽団が結成されるし、また2年後の1883年にはニュー・ヨークにメトロポリタン・オペラ・ハウスができていく。音楽史は、とくにメトロポリタンの出現がオペラ史上画期的であったという。それ以前のオペラの殿堂といえば、1854年につくられたニュー・ヨーク市14番街の「音楽アカデミー」であって、ゴムパースが、現在ではあまり上演されぬマイヤベヤーのオペラ作品を楽しんだのも、またここである。だが音楽アカデミーは、その華麗さと規模の点で到底メトロポリタンの比ではなかったといわれる。

メトロポリタン歌劇場<sup>2)</sup>こそはまさに「少数の百万長者の気まぐれ」であって、「偉大な音楽的事業」ではけっしてなかった。その採算を度外視した上演は、オペラを極度に豪華なものにした。舞台装置もオーケストラも一流であれば、また集まる歌手も世界的なものばかりであった。テノールのヴァハテルやボンチ、またバリトンのスコッティなどの名を想起すればよい。だがゴムパースにとっての最大の幸福は、かのエンリコ・カルーソーの全盛期の声をきき、かつかれと親しく交わりえたことであつた。カルーソーが『リゴレット』を歌ってメトロポリタンの初舞台をふんだのは1903年のことであるが<sup>3)</sup>、それ以来ゴムパースはカルーソーのとりこであつた。かれの自伝は、とくにカルーソーを好んで描いている<sup>4)</sup>。たとえばオペラの終る時刻まで営業しているレストランはきまっているから、おなじ頃に組合活動から開放されたゴムパースが深夜の食事に行くと、舞台のはねた

オペラ歌手たちとよく会うことになる。そうしたレストランの一軒に、カルーソーもゴムパースもいきつけのイタリア料理店があり、そこで2人はスパゲッティを食べながらしばしば語りあった。面白いことにその店のスパゲッティは、カルーソーを崇拝する経営者の気持から、spaghetti à la Caruso と名づけられていたという。実際アメリカ在住のイタリア人にとっては、母国のどの名士もカルーソーの前には影がうすかったのだ。

ゴムパースの描くカルーソーの逸話は、まだつきない。知名の士であったゴムパースは、メトロポリタンにしばしば招待されただけでなく、舞台の裏ないし脇にまで出入りを許されていた。そこから聞くカルーソーの声のすばらしかったであろうことは、想像にたたくない。その得意とする『ボエーム』を歌ったときなど、感情をこめすぎて自分の身を支えられなくなったカルーソーを、舞台係がでてきて支えたという。親しかったゴムパースは、よくカルーソーを支度部屋に訪れた。カルーソーは鉛筆で戯画をかくのがうまく、誰彼なしにスケッチする癖があったが、ある夜自分の支度部屋に話してきたゴムパースの顔を描いた。それを貰ったゴムパースは、もちろん大切に保存した。その後たまたま一次大戦の末期に、イタリア大使館は、イタリアの戦争犠牲者の救済のための募金事業を計画したことがある。ゴムパースは、その事業に奉仕をしていた自分の娘から競売品の提出を求められるままに、かつてのカルーソーのスケッチを思いだし、それを競売にだした。160ドル前後で売れたという。

ゴムパースがこのように音楽家に感かれたのは、かれの生来の音楽好きもさることながら、かれの独特の芸術家観によるものであった。かれによると<sup>5)</sup>、オペラ歌手と組合指導者とは、その表面上の相違にもかかわらず究局には人間の魂に奉仕するものであって、それへの理解と同情なくしては、人間の内面の経験を解釈することはできない。生活の美はさまざまだが、美とは、つまり魂の自己表現を可能ならしめるような調和ある関係の確立である。その点では、感情移入なしに行動することができず、また事物の人間的側面を無視することができないというゴムパースの態度は、かれ自身の思想とうまく一致していたといえる。

このように究局には自分は音楽家に帰一できると考えていたゴムパースであったから、かれは、音楽家を組織することに大きな満足を感じていた。オーエン・ミラーなる音楽家が音楽家全体の経済的地位の向上に腐心しているのを知ると、ゴムパースは、すぐさまミラーに援助の手をさしのべた。まずなすべきことは、職業音楽家の地位ないし報酬をば、趣味ないし副業としての音楽を売物にする連中の競争の脅威から確実に守ってやることで

あった。いいかえると、音楽家の経済問題の性格は、基本的には賃金労働者のそれとかわらないのである。

音楽家の組合運動は、メトロポリタン歌劇場をもゆさぶった<sup>6)</sup>。その不満の原因は、同劇場の合唱団員の報酬のあまりにも低いことにあった。1906年のメトロポリタンの初日（1月3日）は、例によってグノーの『ファウスト』が予定されていたが、初日の出演料はカルソーたち4人の主役にて計3,900ドルに達したのにたいし、合唱団員は毎日歌って1人週15ドル、すなわち一夜あたり2ドル14セントだったという。当然のことながらこれに不満をいだいたかれらは、週25ドルを要求するとともに、合唱団を夜行列車の普通座席でつぎの上演地に移すという慣行の廃止をもとめた。劇場経営者のハインリッヒ・コンリードは、かれらの報酬の低いことについては善処を約したが、組合を承認しようとはしなかった。そこでかれらは、初日は出演しないと通告した。あわてた指揮者のフランコ氏は、大急ぎでコーラスの部分を管楽器で演奏できるように総譜を直す有様であったが、本番では、カルソーの声が全体をなんとかひきたさせた。けれども幕間に舞台にでてきたコンリードが声明文を読み、自分が合唱団員の組合に抵抗するのは芸術を尊重するためだとのべたところ、コーラスを管楽器にかえた芸術尊重ぶりにたいして、満場に嘲笑がおこったといわれる。結局コンリードも妥協の必要を痛感し、合唱団員の報酬を週5ドルひき上げ、かつ夜行便の利用については是正することを約束したので、ここに一応の解決がみられた。この交渉でゴムパースが一役買ったことは、もちろんである。

ゴムパースの長女のサディーは、父方の血を受けて声楽の素質に恵まれ、とくに父の愛情を恣いままにした。ゴムパースは、すすんで一流の音楽家を娘につけた。相当な出費だったらしい。やがてサディーは、父の期待をになって舞台にでるようになったが、主としてボードビルで歌ったというから、格式高き声楽家にはならなかったらしい。娘の演奏旅行には母親がつきそったため、ゴムパースは、いつも一人であることが多くなった。孝行もののサディーは、母を父のもとに帰すべきことに気づき、やがてそのために歌手生活を断念した。それだけにゴムパースは、余計にデザイナーがいとおしかったのであろう<sup>7)</sup>。のちにヨーロッパ旅行をしたさい、ゴムパースは、娘のサディーが流感で死んだとの報せをうけたが、それがどんなに痛手だったかは、かれのなに気ない文章からも十分に汲みとれる。

ゴムパースはまた、音楽ほどではないにせよ、ロンドンの少年時代から演劇好きであった。「リズムと音域との違いだけがオペラとドラマとを区別せしめる<sup>8)</sup>」というゴムパース

の言葉からもわかるように、かれは、オペラ歌手と組合指導者との間の内面的共通性が舞台俳優についてもいえるものと考えていた。かれは、そのような目でシェークスピア劇の一流俳優をみた。かれは深く演劇人を愛したから、ときとして有名すぎるゴムパースの演説会がかれらの観客を奪ってしまうことを、なかば楽しみながらも済まなく思っていた。かれは、音楽家にたいするとおなじく俳優や舞台係にたいしても、その生活の安定と向上のために腐心し、またかれらの組織化のためにつとめた。ときには、かれらの争議の解決のために経営者と直談判をすべく、深夜にニュー・ヨークからロング・アイランドまで車をとばしたこともある。

ゴムパースは、音楽家も俳優も究局には組合指導者と相通ずると考えていたものの、音楽と違って演劇は人間の魂を具体的な演技をもって表現するものだから、かれは、音楽家にたいするとは違った親近感を俳優にたいしてもっていた。かれは多くの俳優と近づき、そして多くの俳優の信頼をうけた。1919年の8月に2,500人におよぶ俳優のストライキがおこったときなど、かれらは、なによりもまずゴムパースの指導を待ちのぞんだ。たまたまそのストライキの最中にヨーロッパよりニュー・ヨーク港に着いたゴムパースは、乞われるままに食事もとらずにレキシントン街劇場の俳優集会にかけつけたという。

いずれにせよ音楽家と俳優とは、ゴムパースの組織化活動の貢献もあって、やがて「アメリカ音楽家同盟」(the American Federation of Musicians)<sup>9)</sup>および「俳優公平組合」(the Actors' Equity Association)<sup>10)</sup>なる組織をつくりあげた。これらの組合は、もちろんAFLの傘下にはいったが、このことは、AFLにとって一種の象徴的な意味をもった。というのも一般に音楽家なり舞台俳優というものは、その技能の独占的な性格からして古典的なモデルの組合をつくるのにもっとも適していたが、これこそはAFLの組合原則にのっとった原型だったからである。

- (1) 以下の音楽史的記述は、J. T. Howard & G. K. Bellows, *A Short History of Music in America*, New York, 1958, pp. 86, 151—156 による。
- (2) 外電の伝えるところでは、このメトロポリタン・オペラ・ハウスも83年の年波には勝てず、取りこわすか否かで1年以上ももめていたが、今年(1967年)の1月17日に取りこわしと決り、早速作業が始められたという。(昭和42年1月19日付『朝日新聞』夕刊)
- (3) 音楽関係の詳細事については、M. O. Thompson, ed., *Grove's Dictionary of Music and Musicians*, 1964 による。

- (4) Gompers, *op. cit.*, pp. 467—468, 472—478
- (5) *Ibid.*, p. 468
- (6) 以下の記述は, Irving Kolodin, *The Story of the Metropolitan Opera 1883—1950. A Candid History*, New York. 1953, pp. 196—199 による。
- (7) サディーが父にもっとも愛されたことは, ハーヴェイも指摘するところである。  
(Rowland Harvey, *Samuel Gompers*, 1935. p. 253)
- (8) Gompers, *op. cit.*, pp. 468—469
- (9) 音楽家の組合の歴史は古く, 地方的な動きを迎れば1857年までさかのぼる。1871年にフィラデルフィアを中心に「全国音楽家組合」(N.M.A.)<sup>1)</sup>がつくられたが, 実力なく, たったの10年間存続したにすぎない。これとは別にシンシナティを中心につくられた「全国音楽家連盟」(NLM)は成長をしめし, 1896年までにメンバー数9,000に達した。NLMは, AFL加盟をめぐって議論が絶えなかったが, 1896年にNLMがAFL加盟を否決すると, AFLは, すでにAFLに加盟ずみのNLM傘下の各支部に召集をだし, 同年のAFL大会で, the American Federation of Musicians の認可証を発行した。これを機にNLMは崩壊しだしたといわれる。(Adolf Sturmthal, ed., *White Collar Trade Unions*, University of Illinois Press, 1966, pp. 325—327)
- (10) 俳優組合のAFL加盟は, 1910年に結成された White Rats Actors Union の縄張りが1911年のAFL大会で認められたのが始まりである。Equity Association の結成は1913年のことである。(Philip Taft, *Organized Labor in American History*, 1964, pp. 346—347)

## 23 女性の組合運動家たち

ゴムパースは, 組合創生期には運動家の活動がいかにその家族の犠牲を必要とするかを痛感していたから, 組合運動家は結婚すべきでないと日頃から考えていた。そのゴムパース自身が自己の持論に反したのだから, かれが妻の献身を深く謝しているのも当然である。もちろんこのような内助の例は, 多くの他の組合運動家の妻たちについてもいえることであって, ゴムパースは, 組合運動にたいするかの女たちの寄与を大いに評価している。

このような妻の内助の貢献は別としても, 当時はすでに多くの産業でかなりの婦人労働者が雇用されていた<sup>1)</sup>, また組合運動の根本に性による相違のあるはずもないから, 文字どおりの組合運動家が女性のなかからでたととしても, 一向におかしくはない。たとえば

葉巻工組合員だったメアリー・ハウスラー (Mary Hausler) 夫人は、1877年の大葉巻ストライキにすばらしい組織活動の才をしめしたし、またかのアイラ・スチュアートの妻は、マサチューセッツ労働統計局の活動を援助し、その年次報告執筆者の1人になったといわれる。婦人解放というもっと大きな立場からは、スーザン・アンソニー (Susan B. Anthony) やキャリー・キャット (Carrie C. Catt) 夫人の婦人選挙権運動があげられるし、またジョセフィン・ラウエル (Josephine Shaw Lowell) 夫人による慈善活動も無視できない。とくにラウエル夫人は、貧困の撲滅にとって労働運動ほど有効なものは他にないことを悟り、しばしばゴムパースの助言をもとめた。

婦人の組合運動家ということになると、無視できないのは当時のAFLの婦人オーガナイザーたちである。ゴムパースの自伝は、とくにメアリー・ケニー (Mary Kenny) 嬢とアイダ・エッテン (Ida Van Etten) 嬢の2人に頁を割いている。ゴムパースとケニー嬢との最初の出会いは、1891年のゴムパースのシカゴ訪問の折である。ゴムパースは、かの女が組合運動に熱意をもっていることを知ったので、珍しさも手つだっただけかの女をニュー・ヨークに呼び、試験的に組織活動をやらせてみた。その結果は上々だったものだから、ゴムパースはケニー嬢をAFLの正式のオーガナイザーに任命し、ボストンの活動家ジョン・オ＝サリヴァン (John F. O' Sullivan) のもとに派遣した。メアリーとジョンはやがて愛しあって結婚したが、2人の活動はなおも続いた。一方エッテン嬢は、製本工出身のケニー嬢とはちがって恵まれた環境のもとに育ったこともあって、その労働運動への接近も知的ないし観念的であった。たとえばかの女の指導するニュー・ヨーク市の「労働婦人協会」(the Working Women's Society) は、労働統計の蒐集やストライキの援助を目的とするものでしかなかった。ただしこの協会の労働保護立法につくした功績は大きく、とくに女性工場監督官の人数をふやすことを定めた1890年のニュー・ヨーク州法は、エッテン嬢に負うところが大きい。

けれどもエッテン嬢のような労働運動への知的な同調者のたどる道は、きまっている。かの女は、あるときゴムパースの事務所を訪れ、労働運動に尽す第一歩として一連の講演をする機会の与えられることを求めた。その熱心さに負けたゴムパースは、かの女にその機会を与えたが、かの女の第1回の講演はお粗末な抽象論にすぎず、ゴムパースからその点を指摘されると、かの女はもはやそれ以上の機会を要求しなかった。けれどもエッテン嬢は、ゴムパースから慰めと勇気とをあたえられて労働指導者たらんことをふたたび希い、ニュー・ヨークの女子羽毛労働者の組織化にのりだした。これにかなりの成功をおさ

めたため、調子にのったエッテン嬢は、「婦人労働者たちにストライキをおこなわせ、ストライキの意義を知らしめたい」とまで考えるようになった。ゴムパースは、このようなエッテン嬢の態度を叱りとばし、ストライキのすべき時でないことを説いたが、すでにかの女によって点火されたニュー・ヨークの羽毛労働者たちは、やがて一斉にストライキに突入してしまった。だがエッテン嬢に争議指導の経験のあるわけがない。争議資金が枯渇してしまうと、ストライキは敗れるべくして敗れさった。エッテン嬢は、これを契機に急速に社会主義に傾いた。一度ゴムパースの前にあらわれ、うまくかれを口説いてAFL年次大会の演壇にたち、約束に反して社会主義の宣伝をやったこともある。それ以後かの女は、ゴムパースの前より姿を消した。何年かのちゴムパースがエッテン嬢について得た消息は、かの女がバリのある宿の屋根裏部屋で貧困と飢の中に淋しく死んだという外電だった。ゴムパースのエッテン嬢についての自伝の叙述は、かの女にたいする愛惜の念に満ちている。

婦人労働者の組織化については、かの労働騎士団がすでにかかなりの成功をおさめていたから<sup>2)</sup>、ゴムパースがこれに力をいれたのも不思議ではない。ゴムパースは、1888年のAFL年次大会で婦人労働者の組織化の必要なことを力説したが、そのさいかれの提案した方法は、(1) AFL傘下の既存の組合に婦人労働者を加入させる、または(2) 婦人労働者だけの組織をつくる、というものであった<sup>3)</sup>。だが当時の職能別組合のほとんどは婦人労働者に門戸を開放しなかったから、AFLのオーガナイザーが同一事業所に男女別の組織をつくることは、けっして珍しいことではなかった。AFLが直接に認可証(charter)を交付した婦人労働者の組合としては、ニュー・ヨーク州トロイ市のカラー・シャツ女子労働者の場合が重要である。かの女たちは、1891年1月に組合を結成して賃金切下げ反対のストライキに見事勝利したが、これに力をえたAELは、その組合幹部の婦人たちをAELのオーガナイザーに任命した。メアリー・エヴァリン(Mary S. Evaline)とドラ・サリヴァン(Dora Sullivan)がそうである。面白いことにこのような婦人オーガナイザーの任命には、また別の理由があった。フィリップ・フォーナーによると、男子のオーガナイザーは言葉が激しく、ときには酔払っていたりするので、婦人労働者はそれに不満だったし、一方男子のオーガナイザーからすれば、一日の労働を終えてのち婦人労働者に近づくのは苦手であったというのである<sup>4)</sup>。

いずれにせよAFLの婦人オーガナイザーの任命は、ゴムパースがかれなりに婦人労働者問題を重視した現われであった。かれは、婦人労働者をその業種の組合に組織すべきだ

と考えただけではなく、つとに男女同一賃金の原理を主張していた。のちにヴェルサイユ会議で「国際労働法制委員会」がこの原理を確立したのは、委員長たるゴムパースの力によるところが大きい。かれの議論の特徴は、婦人労働問題と幼少年労働問題とを区別していたことにある。かれは、幼少年労働者については十分な保護と監督が必要であるが、婦人労働者についてはかの女たち自身の自覚と努力こそが問題解決の鍵であると考えていた。このような考え方<sup>5)</sup>からすると、1903年に生れた「婦人労働組合連盟」(the Women's Trade Union League)の活動にゴムパースが期待したのも当然である。この連盟の基本目的は、(1) 婦人労働者の組織化を推進し、(2) 婦人を組織することの必要性を労働組合に教育し、さらに (3) 婦人幼少年にたいする保護立法の制定につとめる、というものであった<sup>6)</sup>。当初は、啓蒙的な社会事業家型の婦人たちがその指導にあたった。それに資産ある婦人たちの資金援助もあった。こうした指導のあり方は、アウトサイダーはあくまで助言者にとどまるべきだというゴムパースの立場と合致しがたいものであったが、1907年頃から連盟の指導層は主として婦人労働組合員となった。連盟とAFLとの間にはとくに公式の関係はなかったが、連盟は、婦人労働者を組織してそれをAFLに加盟させるのに努力したし、またAFLは、すくなくとも言論をつうじて連盟を大いに支持した。ただし実際活動の面では、AFL傘下の労働組合は、ゴムパースの意に反して連盟にたいして敵対的ないし非協力的だったという<sup>7)</sup>。

見方によると、AFLは、「婦人労働組合連盟」をもっぱら利用したといえるかもしれない。それはともかくとして、この時期は、AFLの婦人オーガナイザーの登場した点で注目されてよい。すでにあげたケニー、エッテン、エヴァリン、ドラ・サリヴァンのほかには、E・E・ピット嬢、ハンナ・M・モーガン夫人、エヴァ・M・ヴァレシュ夫人といった名前があげられる。だが残念なことにゴムパースのめざした婦人労働者の組織化は、婦人オーガナイザーの任命にもかかわらず、大した成功をおさめなかった。かれは、1892年にこのことを率直に告白している。そのみではない。1894年1月、ゴムパースはAFL執行評議会に4人の婦人オーガナイザーの任命を勧告したが認められず、同年8月の婦人の一般オーガナイザーの数は零だったといわれる。婦人オーガナイザーの復活は、1898年になってやっと認められたが、その数とてわずか1名にすぎなかった<sup>8)</sup>。

(1) 80年代のある調査によると、各産業の婦人労働者数はつぎのようであった。

衣	服…389, 231	クリーニング…109, 280	綿	織	物…92, 394
他	の織物…42, 420	靴	…21, 007	製	箱…14, 126

煙	草… 10,868	印	刷… 9,322	絹とレイヨン… 9,211
絨	氈… 7,674	帽	子… 6,357	

Eleanor Flexner, *Century of Struggle, the Woman's Right Movement in the United States*, 1959, p. 193.

- (2) 労働騎士団は、1881年に最初の婦人部会 (woman's assembly) をつくっている。婦人メンバー数は正確ではないが、マサチューセッツ州では騎士団メンバーの7人に1人は女性だった。1883年には始めて総会 (General Assembly) に婦人代議員がでたが、1886年総会では、代議員660名のうち婦人は16名だったといわれる。(Ibid., pp. 194, 196)
- (3) Philip S. Foner, *History of the Labor Movement in the United States*, Vol. II, 1955, p. 189.
- (4) Ibid., pp. 190—193
- (5) ついでながらいふと、婦人労働者の賃金および時間の立法による規制についてのゴムパースの考え方は、時代的に変化している。1890年にはゴムパースはそれを支持したが、1912年頃までにそれを疑いだしたといわれる。いいかえると、産業発展の初期段階では、婦人は父や夫に依存せねばならない弱者であるから保護の必要もあるが、婦人の権利が認められ、また産業上の地位も向上しだすと、保護よりも婦人の自覚こそが必要だといっているのである。たとえば Mandel, *op. cit.*, p. 180
- (6) Philip S. Foner, *History of the Labor Movement in the United States*, Vol. III, p. 228
- (7) この点を W. T. U. L. が A F L 執行評議会に訴えると、執行評議会には A F L 傘下の組合を拘束する権限がないのだと、回答される始末だった。ゴムパースは W. T. U. L. に敬意を表すつもりで、1907年 A F L 大会の議長団に W. T. U. L. 代表を配したが、W. T. U. L. が A F L スタッフとしての婦人オーガナイザーを要求すると、もちろん拒否されたという。(Ibid., 230—232)
- (8) Foner, *History of the Labor Movement in the United States*, Vol. II, p. 194

## 24 ゴムパースの私事さまざま

ゴムパースの家庭生活は、貧しいながらも心の通いあうものだったが、まったく満ち足りたものではなかった。先に生れたものが先に逝くというのが、望ましい世の常であらう

が、ゴムパースは、成人した1人の息子と2人の娘をつぎつぎと失った。それだけではない。晩年には妻に先だたれ、70才にして孤独を味わねばならなかった。若き妻との再婚だけが、かろうじてその侘しさを救ったにすぎない。

ゴムパースがどうやら一戸建に住めるようになったのは、40才代も半ばをこえてからである。ロンドン時代はもちろんのこと、ニュー・ヨーク時代の家もすべて、せいぜい2室ないし3室のアパートメントであって、水道は共同で便所は庭そのものであった。当時のニュー・ヨークでは、貧者は水にすら不自由したのだ。そして貧困の故に生命を全うできなかった子供の墓が、数千となくみられたという。こうしたなかでゴムパースは育ち、そして父ともなった。ゴムパースは、その自己抑制をつうじて、家庭を貧しさにつきものの不和から守ったばかりでなく、家庭をば労働運動家としての仕事のリズムにうまく合わせた。ゴムパースの仕事ぶりをみて、かれの母は「ゴムパース家のものは極でできている」と口ぐせにいったし、まるで「ニュー・ヨーク港の引船」だと舌を巻く友人もいた。

自己の過去をかえりみて、子供にだけは教育を与えたいという世の父の願いも、結局ゴムパースにはかなえられなかった。長男のサミュエル二世は14才から印刷工場に働きにでねばならなかったし、次男のヘンリーは石切工であるとともに父ゴムパースの助手をつとめたし、三男のエイブラハムは衣料店で働いたし、また四男のアレクサンダーは葉巻工の道歩んだ。子供たちのなかで比較的恵まれていたと思われるのは、声楽の勉強の機会を与えられた長女のサディーくらいのもので、次女のローズは平凡な郵便配達夫と結婚した。

さききのべた一戸建の生活は、1897年にワシントンで始まっている。長男と次女はすでに結婚して別居しており、三男はニュー・ヨークの衣料店にとどまったから、次男と四男と長女がまだ親許にいたことになる。だが数年後には三男のエイブラハムが胸を病んで帰ってきて、やがて西部へ転地療養に移って死んだ。それ以前にゴムパースの母と次女のローズは、かれの西部旅行中に相ついで世を去っていた。不幸はこれだけにとどまらず、一次大戦後のゴムパースのヨーロッパ旅行中に、かれは最愛の娘サディーを失った。サディーの死後間もなく、ゴムパースの妹のペラのところで世話になっていたゴムパースの父<sup>1)</sup>が、92才の生涯を閉じた。サディーの死の痛手をもっとも蒙ったのは母親であって、数カ月の放心状態ののち1920年の5月に、かの女は世を去った。妻の死によってゴムパースは、まったくの孤独におちいった。だがかれは孤独に堪えうる男ではなく、また労働指導者としての任務もまだ終っていなかったから、かれには伴侶が必要であった。たまたま何

年か前に知りあった英国人の陶芸家に音楽家の長女がいたが、そのとき以来の縁で、ゴムパースは71才にしてこの女性と再婚した。もっともゴムパースは1924年に74才にて世を去ったから、かれの老いし二度目の青春は、いささか儚なかったというほかはない。

ゴムパースが血縁関係を重んじたことは、すでにこの連載の始めに描いたところである。ゴムパースは自己のその気風を、親のしつけと本能とによるものとみている。その気風を反映してゴムパースの家の門戸は、ニュー・ヨークとボストンに住む多くの親類縁者に広く開放されていた。ゴムパースの自伝を読んで面白いのは、かれが有名になるにつれ、にせの親類がしばしば名乗りをあげてでて、かれを面喰わせていることである。たとえば1890年代の初めにミシガン州の一婦人が手紙をよこし、新聞の写真にてたゴムパースは家出したきりの自分の息子だといいはった。ゴムパースは、自己の経歴や家族のことを詳しく書きおくれたが、その婦人は、ゴムパースが子としての責任をのがれるために偽りをいっているとして、非難の手紙を再度よこしたという。

別の例はもっと愉快である。上記の事件ののちしばらくして、たまたまソート・レーク市にいたゴムパースは、叔母と名とる一婦人の招待をうけた。かの女の家を訪れたゴムパースは抱擁で迎えられ、かの女が叔母であることをしめす写真アルバムをみせられたりした。かれはその誤りであることをすぐ悟ったが、叔母だと信じている婦人の気持を傷つけないため、ホテルに眼鏡を忘れてきたとの口実で辞し、その夜の自分の講演会の傍聴券を2枚だけメセンジャー・ボーイに託してとどけた。その夜講演会の特別席にあらわれた自称の叔母父妻は、ゴムパースのことをいとも大げさに甥だといってまわったという。

もちろん真の親類縁者に遭遇しなかったわけではない。前記の旅行の折にコロラド州のボールダー大学を訪れたゴムパースは、母方の血縁にあたる一婦人の訪問をうけ、お互いの名乗りを喜びあうことができた。もっと楽しかったと思われるのは、1909年のゴムパースのヨーロッパ旅行中のでき事である。ローマを訪問した折、ゴムパースの随員のJ・W・サリヴァン氏がかって滞在したことのある家を訪問したところ、かれの会った美術家兼美術商の未亡人が、娘時代の姓がゴムパースだったので、アメリカ人サミュエル・ゴムパースに興味があり会いたいという。それを伝えきいたゴムパースは、その婦人を翌日の食事に招いた。だが急用で約束の果せなくなったその婦人が、そのお詫びに約束よりも3時間早くゴムパースをホテルに尋ねたところ、ゴムパースは、顔の似ていることからして、ロビーの人混みのなかに未知のその婦人をすぐに発見し、お互いに名乗りをあげあった。

血縁を重んじたことは、ゴムパースの人柄の一面をしめすものだが、他にゴムパースの

自負している点は、みずから世俗的な出世の機会を断ったことと、賭のきらいだったこととである。ゴムパースのような労働界の大立物となると、いろいろと誘惑の多かったであろうことは充分に想像できる。ゴムパースの語るところによると、80年代の終り頃にフィラデルフィアの印刷業者ジョージ・ギボンズ氏がメキシコ大統領の代理人と称する人物をともなってゴムパースを訪れ、アメリカ人をメキシコに入植させるための開発会社の社長になるよう懇望している。年俸5万ドルだったというから、当時としては破格の申し出と考えてよい。これを固辞したゴムパースにたいして、ギボンズ氏は「いまましい馬鹿奴」と書きおけているが、その気持分らぬでもない。おなじくゴムパースは、ニュー・ヨークの法律家にして金融家でもあるジョン・R・ドス・パソス氏から、氏の企てる産業災害保険会社の社長（年俸25,000ドル）にならぬかと誘われ、素っ気なく断っている。その他ゴムパースの拒絶したものとしては、共同事業の申し入れや、また葉巻の商標にゴムパースの名前を使わせてもらいたいとの要求などがある。前者の場合には、会社名をゴムパース商会にしてもよいとまでいわれたし、後者の場合には、葉巻業者となった弟や息子からもゴムパース名の商標利用の権利をもとめられる有様であった。

ゴムパースは、金銭的利害をともなう問題について、以上のように淡白だっただけではない。かれは、賭をまったくしなかった。かれと血縁関係にあたるヨーロッパの宝石商ルイ・ゴムペール氏は、たまたまヨーロッパにきたゴムパースをモンテ・カルロに招き、モナコ国王の特別の許可証つきで市内を案内したが、ゴムパースは、たとえばカジノを訪れても、見物に終始して一文も賭けなかった。それはかれの主義でもあったのだが、かれは、自分がそのような態度をとる理由について、人間の悪や弱点をすべて除きえないことはよくわかるが、それだけに自分の仕事を最大の貢献のなしうるものにかぎりたいためだ、と説明している。要するに自分は忙しいのだ、というのであった<sup>2)</sup>。

- (1) サミュエル・ゴムパースの父ソロモンは、すぐれた記憶家だったらしい。サミュエルが1909年に2度目のヨーロッパ旅行に立つ前、一タニュー・ヨークでゴムパース一族の集いがおこなわれたが、サミュエルの提案で、父ソロモンは、記念のために記憶だけを頼りに、自己の祖父から自己の曾孫にいたる6代のゴムパース家の歴史を書きとめた。ゴムパース自伝には、それが7頁にわたって詳しく記されている。ゴムパース研究のために参考になるものだが、労働者階級の血のずっと流れていることが注目されてよい。事実、この夕の集いに参加した父ソロモン、サミュエル、息子のサミュエル二世、その娘（すなわちサミュエルの孫）のフロレンスは、それぞれの職種の

組合員カードをもっていた。なお父ソロモンは、子供、孫、曾孫の氏名、住所、生年月日を諳んじており、誕生日の朝には誰もがお祝の葉書を期待しえたという。(Gompers, *op. cit.*, pp. 502—507)

- (2) 自伝には大なり小なり自讃はつきものだが、ゴムパースも例外ではない。かれは、自己の誠実さの証明として一例をあげる。1923年初頭、判事オールトン・B・パーカー夫妻がワシントンのゴムパースを訪れたとき、氏は妻にゴムパースを紹介している。「ねえお前、ゴムパース氏を紹介させておくれ。氏は、投獄されるのを防ぐためであっても、嘘のいえない人だ」と。(Ibid., p. 516)

## 25 ゴムパースと歴代大統領<sup>1)</sup>

ゴムパースがロンドンよりニュー・ヨークに移ってきたのは16代大統領リンカーンの時代であり、またその他界したのは30代大統領クーリッジの時代であるから、かれは、15代にわたる大統領(人数にして14人)の統治した合衆国を生きたことになる。ゴムパースの歴代大統領にかんする記述を読むと、ゴムパースによってついに合衆国も、従来社会的に無視されていた労働指導者が一国の大統領と対等に話しあえるという段階に達したことを感じさせる。ゴムパースの交際は、政界および財界の広きに及んだけれども、そのためにゴムパース羅針盤の狂うことはなかった。

ゴムパースが最初にみた大統領はエイブラハム・リンカーン(在任1861~1865)であって、かれは、ニュー・ヨーク市議事堂の遺体室に安置されたリンカーンに別れを告げるために長い列をつくった1人である。だがかれが個人的に会った最初の大統領は、リンカーンより2代のちの18代大統領ユリシーズ・S・グラント(在任1869~1877)である。その会見は、労働代表として連邦公務員の8時間法の完全実施を要求するためであった。19代大統領ラサフォード・B・ヘイス(在任1877~1881)との最初の出会いは、ピッツバーグ市制百年祭の祝典の折に、ゴムパースが大統領に紹介されたときである。大統領は、読んだばかりのエドワード・ベラミー著「顧りみれば」(*Looking Backward*)の感想をのべ、お互いに楽しい会話をしたらしく、ゴムパースは大統領に好印象を抱いている。

ところで労働運動の進展しだす80年代にいたると、敵対的な大統領が登場しだすことになる。1881年に20代大統領に就任したジェームス・A・ガーフィールド(在任1881年5月~9月)は、1877年の鉄道ストライキにたいし下院議員として軍隊の派遣の要を力説した前歴の持主だったため、ゴムパースは、かれにたいして終始好感をもたなかった。大統領

が就任の年の7月に暗殺者に射られて9月に死んだとき、たまたま埋葬地の近くで開かれた葉巻工組合大会は、死せる大統領に弔意をしめして大会の一日延期を決定しようとしたが、ゴムパースは、ガーフィールド大統領はそのような弔意をしめずには値しないとして、強くその措置に反対した。これがセンセーションを巻きおこしたことは、いうまでもない。のちになってゴムパースは、自己のとった態度にいささかの反省を加えているが<sup>2)</sup>、ゴムパースにはこのような一徹なところがあった。

ガーフィールドの残存期間（1881～1885）をつとめた21代大統領チェスター・A・アースーや22代大統領スティーヴン・G・クリーヴランド（在任1885～1889）については、ゴムパースはほとんど語っていない。つぎの23代大統領ベンジャミン・ハリソン（在任1889～1893）にたいしては、ゴムパースは、冷酷な船長にたいする反抗の故に死刑を宣告された水夫の減刑運動を再度にわたっておこなったが、大統領はなんの回答をもあたえなかった。クリーヴランドが24代大統領（在任1893～1897）に再選されると、上記の減刑の嘆願がまたも大統領にたいしてされたが、その結果はむなしかった。ゴムパースはいたく失望した。その失望は、かのプルマン・ストライキにたいして大統領が干渉したとき、大統領への不信に転じた<sup>3)</sup>。クリーヴランドは、のちに「全国市民連盟」（NCF）と関係をもつにいたったが<sup>4)</sup>、かれはニュー・ヨーク州知事の時代からすでに反労働者的だったことでもあり、ゴムパースに好感をもたれていない。

これにくらべると、25代大統領ウィリアム・マッキンレー（在任1897～1901）とゴムパースとの関係は長くて深い。高率関税の代名詞ともいべきマッキンレーは、下院議員時代からすでに保護貿易主義者だったから、おなじく葉巻産業の保護を唱えるゴムパースと親しかったとしても、不思議ではない。大統領に就任してのちも、マッキンレーはゴムパースとしばしば会い、労働者の声をきく努力を怠らなかつた。しかし労働者の声が、マッキンレーの政治にすべて生かされたわけではない。たとえばハワイの併合問題は、ハワイの請負労働制度（労働力の80パーセントは日本人と中国人だった）の脅威の故にゴムパースがとくに反対したものだ<sup>5)</sup>。

マッキンレーとゴムパースとの交情は、マッキンレーの非業の最後であえなく終った。だが幸なことにゴムパースは、つぎの26代大統領セオダー・ルーズヴェルト（在任1901～1909）とも親しい関係をもつことができた。ルーズヴェルトとゴムパースとの関係は、ルーズヴェルトがニュー・ヨーク州会議員時代にかのテネメント法案を手がけて以来のものである。その後も、労働勢力にたいするルーズヴェルトの友好的な態度はつづいた。たと

えばニュー・ヨーク市警察長時代には、ストライキにたいする官憲の暴虐ぶりをゴムパースに指摘されて善処したし、さらに海軍次官になると、海軍工廠の労働条件に深い関心をしめた。2人の関係は、ルーズヴェルトがニュー・ヨーク州知事となっても続いた。しかし真の友情が感じとれるのは、ルーズヴェルトが大統領に就任してからである。かれは、就任直後にわざわざゴムパースを官邸に招き、議会にたいする教書の草稿の内容について意見をもとめたほどである。その折かれは、激論の末最後にはゴムパースの意見を認め、無政府主義者にたいする批判の部分を改めたりした。かれがゴムパースにいかに敬意を払ったかは、ゴムパースが、大統領と会見するのに2、3分以上待たされたことがないと語ったことからわかる<sup>6)</sup>。かれは、従来の目からみると型破りの大統領であって、いわゆる「お役所風」(red tape)を排したばかりでなく、歴代大統領のなかでは始めて教書のなかで「組織労働者」("organized labor")という言葉をつかい、その開明ぶりをしめた。また感銘をうけた本にでくわすと、かれはそれをゴムパースに贈ったりした。

ルーズヴェルトがこのようにゴムパースに敬意を払ったことの裏には、もちろんルーズヴェルトの政治的打算があったと考えられないこともない。バーナード・マンデル氏の描くところでは、ゴムパースは有名になるにつれて次第に自己を意識しはじめ、服装に気を配り、重々しく振舞うようになったという<sup>7)</sup>。2人の会話は、ひろく政治問題一般におよんだ。ルーズヴェルトは、ロング・アイランドの自宅に一夜ゴムパースを招き、合衆国艦隊の世界一周計画を打ちあげることでしたし<sup>8)</sup>、一方ゴムパースは、大統領とのたびたびの会見の場を利用して、大統領にアェルト・リコの援助を決意せしめたこともある。1906年、日露戦争の終結につくした功績にたいしてルーズヴェルトにノーベル平和賞が贈られたとき、かれは、その賞金を産業平和に寄与するように使いたいと考え、そのための実行委員を若干名依頼したが、そのなかにゴムパースが含まれていたことはいうまでもない。

1908年には、天然資源の保存を討議するために全米知事会議が召集されると、ゴムパースも早速大統領からの招待をうけている。だがゴムパースとルーズヴェルトの関係の良かったのは、ほぼこの頃までで、その後の2人の仲は急速に冷たくなった。1908年という年は、政府がトラスト問題を真剣に考慮しようとした年であるが、ホワイト・ハウスで開かれた反トラスト政策にかんする会議では、遂にゴムパースとルーズヴェルトの意見が合わなくなってしまった。組織の大規模化と支配の集中は不可避の時流であると考えるゴムパースからすると、ルーズヴェルトの反トラスト政策は、たとえ善意に根ざしたものである

にせよ、あきらかに限界がみえていたのである。意見の対立に業を煮やしたルーズヴェルトが、ゴムパースの口を封ずるつもりで「だがわたしは合衆国の大統領（the President）ですぞ」と高飛車ででたところ、ゴムパースから「わたしだってAFLの会長（the President）ですぞ」と逆襲されたという<sup>9)</sup>。これは話としては面白いが、好ましい友誼関係をしめず会話とはいいがたい。

のみならず1908年の大統領選挙にさいして、ゴムパースはルーズヴェルトの立候補に反対したため<sup>10)</sup>、2人の関係の悪化は決定的なものとなった<sup>11)</sup>。もちろんその後も表面上の交際はずつづかれ、たとえば1912年にルーズヴェルトが3選反対の人物に狙撃されたときなど、ゴムパースはすぐに鄭重な見舞の電報をうったほどだが、もはや以前の暖かい関係はとりもどせなかった。そのよい例は、1917年夏にロシアのケレンスキー政府の派遣した使節団の歓迎の演説会が、ニュー・ヨーク市のカーネギー・ホールで開かれたときのことである。演説の皮切りを求められた元大統領のルーズヴェルト氏は、たまたまその時期に発生したイースト・セント・ルイスの人種暴動に労働者が参加しているとして、その点を激しく攻撃した。続いて登壇を求められたゴムパースは、労働指導者として当然のことながら、問題の人種暴動に労働者の責任はなく、ルーズヴェルトの非難はあたらないということを描した。ゴムパースが話しおわると、ルーズヴェルトがすぐにまた発言をもとめたが、それからの調子がいけなかった。演説するうちに興奮しだしたルーズヴェルトは、ゴムパースを指さして激しくののしり、挙句の果は掴みかからんばかりとなった。ゴムパースの自制によって事なきをえたものの、これは2人の和解をますます困難にしまった。のちに第一次世界大戦に合衆国も加わるようになって、ルーズヴェルトは、「アメリカニズムのための闘い」にたいするゴムパースの貢献をたたえ、ゴムパースをいたく感激させたけれども、これが両者の心をどれほど結びつけたかは疑問である。

27代大統領ウィリアム・H・タフト（在任1909～1913）は、ゴムパースの目からみると、個人的には実に善意に溢れた人物でありながら、公式の立場にたつと、その善意を法律的思考のなかに生かすことのできない人物であった。かれがゴムパースから「差止令の父」（“Father of Injunctions”）という有難くない名前を頂戴したのも、結局はそうした人柄のためであろう。ゴムパースとタフトとの出会いは、タフトのフィリピン総督時代（1900年代の始め）というから、2人の交際はいささか長い。タフトは、その後陸軍長官をへて1908年の大統領選挙に見事勝利したが、その選挙にさしてゴムパースがタフトに批判的な態度をとったにもかかわらず、タフトは、大統領に就任ののちも、「やあ、懐かしの反対

屋さん」とゴムパースに親愛の情をしめしたという<sup>12)</sup>。

ゴムパースからその法律家的冷たさを攻撃されたタフトではあったが、そのかれも、労働者の災害補償の問題については相当の熱意をしめした。かれは、労働災害にさいして被災者側が使用者責任を立証することの必要性をなくし、それによって補償専門の弁護士を駆逐しようとしたのである。かれは、労働者災害補償法案の議会通過のためにはなによりもゴムパースの助力が必要だと感じ、ゴムパースの尽力をもとめた。ゴムパースがそれを快諾したのはいうまでもないが、ゴムパースの持ち前の政治力の發揮にもかかわらず、その法案は上院だけの通過に終わってしまった<sup>13)</sup>。

この問題をのぞくと、タフト大統領は、ゴムパースの予想したとおり、労働者階級の直面する諸問題にあまり関心をしめさなかった。しかしゴムパースの説得が功を奏して、タフトの閉ちた心を開かせたこともある。たとえば、タフト大統領の任期の末期に下院を通過し、次期大統領ウッドロウ・ウィルソンの就任式の直前にやっとタフトが署名したという労働省設置法案(1913年)が、そうである。ゴムパースの説得という点からすると、タフトが葉巻現物支給法案(the Smoker Bill)についで署名させられたことなど、その最たるものであろう。この法案は、葉巻工は自分のつくった葉巻を1日3本にかぎって吸ってよいという長年の業界の慣習にたいして、国税当局が課税しようとするのを防止しようとしたものである。タフトは、ゴムパースからその法案についての説明をきくと、すぐに「宣しい!」と応えたという。

タフトの後をついだ28代大統領ウッドロー・ウィルソン(在任1913~1921)は、ゴムパースの接したなかでもっとも敬意を払った大統領である。ウィルソンは、そのプリンストン大学総長時代には労働組合を非難したほどの人物であったが、政界に転じてからは労働票を得るためであろうか、いちじるしく労働界に好意をしめすようになった<sup>14)</sup>。ウィルソンは、1912年と1916年の2度の大統領選挙にさいし、ゴムパースのいう「友に報い敵をこらしめる」政策の恩恵をうけて労働界に借りができてしまったから、ゴムパースとしては、ウィルソンがその借りをどのように返すかを監視する必要があった。だがウィルソンは、その点では信用のおける人物であって、1915年には海員組合の多年の懸案であったラ・フォレット海員法(the Seamen's Act)にあっさり署名したし、またAFL本部のビルディングが落成したときには、気持よく招待に応じて大統領としての祝辞をのべたりした。ただ、1917年に労働界念願の移民法案が下院を通過したときに、ウィルソンはどうしたわけか前例にならって拒否権を発動し、結局その拒否はふたたび下院によって乗りきら

れることになったが、しかしそのためにウィルソンの労働界にたいする態度のかわることはなかった。

ヨーロッパ大戦の勃発は、ウィルソンとゴムパースとの関係をより緊密なものにした。これは、戦争の遂行には労働界の協力が不可欠であるという平凡な原則の帰結にすぎなかったけれども、ゴムパースが1916年にウィルソンによって「国防会議」(the Council of National Defense)の諮問委員会の委員に任命されたことは、労働界の国家行政への参画という点で画期的なことであった。いい意味でも悪い意味でも俗物性を身につけていたゴムパースが、とくに晩年近くになってこのような名譽を与えられたのだから、気持の悪からうはずがない。ゴムパースは、ウィルソンにたいして個人的に愛憎の念を感じるほどになった。「わたしは大統領在任中のウィルソンを誇らしく思った」<sup>15)</sup>とかれはいう。情報入手の才にたけていたゴムパースは、ウィルソン大統領の暗殺が計画されているとの怪情報に接し、われを忘れて深夜ホワイト・ハウスに飛んでいったこともある。それにしてもこの時期のゴムパースは、労働の代弁者というよりも国家利益の代弁者だという印象がつよい。

旧世界にたいする新世界の代表者としてみると、ウィルソンほどふさわしい人物はなかったとおもわれるし、また1919年度のノーベル平和賞がかれに与えられたのも当然だとおもわれるのだが、国際連盟という具体的な政治の手段をめぐるでは、新世界は、かならずしもウィルソンのよき理解者とはいえなかった。そののみか大戦処理のためにウィルソンはいちじるしく健康を損ねたのだから、ゴムパースがウィルソンを一種の戦争犠牲者とみただのも理由のないことではない。そうした新世界の1人としてみると、ゴムパースは、あくまでウィルソンに忠実な男であった。というのかもかれは、「国際連盟」の労働機構の確立とその発展に尽力したからである。

29代大統領ウォレン・G・ハーディング（在任1921～1923）とゴムパースとの関係は、もっぱらハーディングの大統領就任後のことである。ゴムパースは、就任直後の会見でしめしたハーディングの率直な態度にまず好感をいだいた。そこで、のちに大統領から、精肉業の劣悪な労働状態を描いたある映画の一部削除ないし訂正について製作者側と交渉してほしいと頼まれると、ゴムパースはそれを快よくひきうけている。大統領によると、そこに描かれた姿はすでに過去のものであって、それをそのまま上映させることは無用の誤解を招く、というのである。ゴムパースとしては、この一件で大統領に貸しをつくったつもりだった。しかしハーディングの大統領に就任した時期は、戦後のストライキ時代

(1919~1923年)の最中だったから、大統領は、なによりもまず労働指導者の自重をもとめてやまなかった。労働指導者は、産業の回復のために賃下げを甘受するよう組織労働者を説得すべきだ、というのである。ゴムパースが激怒したのはいうまでもない。だがローランド・ハーヴェイによると、この時期のゴムパースはあまりにも労働意識のない党派的であって、世間の信頼をかちとるには程遠かったという。要するに、ゴムパースは世間を納得させようような男ではなかったというのである<sup>16)</sup>。

ところでこのハーディングは、突然の病にてほどなく急逝し、かわって登場したのが、30代大統領カルヴィン・クーリッジ(在任1923~1929)である。かれは、マサチューセッツ州知事の時代に州の児童労働法に署名したという経験の持主であって、労働問題にかなり理解のある態度をしめしたが、やがて今度はゴムパースのほうが世を去ったため、2人の交渉は短かいものに終ってしまった。

- (1) 歴代大統領にかんする記録や諸事実については、Joseph Nathan Kane, *Facts About the Presidents*, H. W. Wilson Company, 1964。またこの期間の政治的背景については、高木八尺著「近代アメリカ政治史」(岩波書店)がまったく要領よくて参考になる。
- (2) Gompers, *op. cit.*, p. 520
- (3) クリーヴランドが1894年のブルマン・ストライキに連邦軍隊を派遣してのち、同年秋の選挙でかれの党は敗れたが、そのときゴムパースは、クリーヴランドにたいし、これは憲法違反の連邦軍隊派遣にたいする人民の回答だと、電報を打っている。(Harvey, *op. cit.*, p. 78)
- (4) 「全国市民連盟」の第1回会議(1901年)に出席した公益代表のなかに、クリーヴランドの名前がある。(Ibid., p. 145)
- (5) このようにゴムパースの反膨張主義は、基本的には反帝国主義ではなくて、経済的地位への脅威にたいするオポチュニスティックな心配であって、被征服民族への人種的優越感にもとづくものであったと、マンデルは指摘する。事実ハワイの併合に反対し、キューバの独立を唱えたゴムパースは、1898年の米西戦争を機に態度をかえ、マッキンレーがフィリピン、プエルトリコ、キューバ、ハワイを領有したことに同意をしめしたのである。かれは、自分が戦争を讚美しながら、同時に帝国主義に反対するという矛盾に気づかなかった。(Mandel, *op. cit.*, pp. 200—204)
- (6) Gompers, *op. cit.*, p. 529

- (7) ゴムパースは、友人の間では Sam であったが、AFL 会長 Samuel Gompers としてあらわれると、別人のようだったという。(Mandel, *op. cit.*, pp. 170—171)
- (8) この会見でルーズヴェルトは、アメリカ艦隊の世界周航の意義をつぎのようにのべたという。日本が合衆国にたいしてシャクな態度をとるのは、どういうつもりか。連合艦隊の世界周航の目的は、合衆国の友好ぶりを各国に認めさせることであり、とくに日本にたいしては、合衆国の友好ぶりだけでなく、合衆国の力は平凡でないことも認めさせることだと。(Gompers, *op. cit.*, p. 530)
- (9) *Ibid.*, pp. 532—533. この話は有名だからよく引用される。邦訳文献では磯部佑一郎「アメリカ労働闘争史」(講談社), 昭和23年, 89頁。
- (10) ゴムパースは、差止令反対の労働要求を認めた民主党のブライアンを支持し、差止令にたいするルーズヴェルトの態度の一貫していないことを攻撃した。(Harvey, *op. cit.*, pp. 165—169)
- (11) ルーズヴェルトは、1908年選挙のときのゴムパースのやり方を許せず、晩餐会に労働指導者を招くときに、わざとゴムパースだけを外した。ただし他の労働指導者が招待を断ったため、ルーズヴェルトの復讐はならなかったといわれる。(Ibid., p. 184)
- (12) Gompers, *op. cit.*, pp. 538—539
- (13) 連邦議会が災害補償法を制定したのは1908年であるが、この1908年法は一部の連邦公務員を対象とするものにすぎず、全連邦公務員を対象とする法律の通過したのは1916年である。(Lescohier & Brandes, *History of Labor in the United States, 1896—1932*. Vol. III, pp. 570—572)
- (14) Harvey, *op. cit.*, p. 186.
- (15) Gompers, *op. cit.*, p. 551.
- (16) 1921年7月、ハーディング大統領は、自分を訪れたゴムパースにたいして、あなた方の間違いは、正常な状態の回復に努力していないことだ……と語ったといわれる。(Harvey, *op. cit.*, p. 308)

(つづく)